

[377]

氏 名 (本籍)	こ もん えん 胡 文 燕 (中 国)		
学 位 の 種 類	博 士 (ヒューマン・ケア科学)		
学 位 記 番 号	博 甲 第 6252 号		
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学 位 論 文 題 目	Self-image Promotion for Improving Chinese College Students' Well-being: Program Development Based on SAT Therapy (中国大学生のウェルビーイング改善のためのセルフイメージ・プロモーション：SAT セラピーにもとづくプログラム開発)		
主 査	筑波大学教授	保健学博士	宗 像 恒 次
副 査	筑波大学准教授	博士 (学術)	橋 本 佐由理
副 査	筑波大学准教授	Ph. D.	近 藤 正 英
副 査	筑波大学教授	教育学博士	西 嶋 尚 彦

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

近年、中国では急激な経済発展を背景に、国家の教育政策から入学率を促す大学入試政策が実施されているため、大学に進学する学生の著しい増加がみられる。そのような中、「私たちの将来は、すべてこの子にかかっているのだから」という親の立身出世のプレッシャーが学生たちにかかっており、激しい受験競争や就活競争にさらされていて、中国の大学生の生活環境の厳しさが増し、人間関係問題を伴いながら大学生がメンタルヘルス問題を起こしやすい状況になっていると報告されている。

本研究は、中国における大学生の自己イメージを中心に精神健康を含むウェルビーイングに関連する要因を明らかにし、その結果に基づいて中国大学生のウェルビーイング改善のために、いくつかの集団介入プログラムを実施し、その介入効果を比較分析し、彼らのウェルビーイング改善のための効果的な介入法を検討しようとするものである。

(対象と方法)

本論文は三つの研究課題で構成されている。研究課題Ⅰは、大学生のウェルビーイングを決める情緒的支援認知や自己イメージに関する要因を明らかにする目的で実施される横断的調査デザインであり、調査対象は大学一年生 535 名である。そのうち回収数は 460 部（有効回答率 86%）であった。分析法は、統計解析ソフト SPSS、Amos を用いて t 検定、一元配置分散分析、共分散構造分析などを行った。

研究課題Ⅱは、大学生のウェルビーイングや自己イメージを決める親イメージや発現気質認知に関する要因分析を行う目的で実施する横断的調査デザインであり、調査対象が大学生 200 名で、そのうち回収数は 199 部（有効回答率 99%）であった。分析方法は、統計解析ソフト SPSS、Amos を用いて t 検定、クラスター分析、共分散構造分析などを行った。

研究課題Ⅲは介入研究で、介入効果を検討するため、介入前、後、介入後 1 ヶ月、5 ヶ月までの追跡調査を行った。介入研究においては、一つの非介入群と、コミュニケーション・スキルグループ、ストレスマネ

ジメント・スキルグループ、SATセルフイメージ・プロモーショングループの三つの介入グループを設定した。

(結果)

研究課題Ⅰ、Ⅱの対象となった大学生は、いずれも特性不安が高い群は全体の2割、抑うつ傾向がある群は全体の3割、生活満足度が低い群は全体の5割であり、ウェルビーイングの悪化した状態を示した。共分散構造分析を行ったところ、学生たちの情緒的支援認知が自己イメージに影響し、自己イメージが学生たちのウェルビーイングを決めていることが明らかになった。

研究課題Ⅱでは、学生たちの親イメージや、ストレス気質の発現認知が、自己イメージに影響する決定的な要因であり、その自己イメージの良悪がかれらのウェルビーイングを決定していることが明らかになった。

研究課題Ⅲの介入研究では、コミュニケーション・スキルグループやストレスマネジメント・スキルグループは、介入前と比べ、1ヵ月後、5ヵ月後に、各種の自己イメージ指標やウェルビーイングの改善の効果は殆ど見られなかった。他方、SATセルフイメージ・プロモーショングループにおいては、すべての自己イメージ指標やウェルビーイングの有意な改善効果を認めた。一方、非介入グループにおいては、5ヵ月後に、情緒的支援認知や自己肯定感の得点が有意に悪化していた。

(考察および結論)

本研究により、大学生の精神健康を向上させるには、情緒的支援認知を高め、自己イメージを良好にすることが重要であるが、そのためには親イメージを改善し、本人の気質を生かす自己理解とセルフ・ケア行動を促して、自己イメージを良好にすることがウェルビーイングの改善に最も重要であることが示唆された。

介入研究では、本人の気質を生かす気質コーチングによって、自己理解の知識が増えることによって、参加者に自分の気質を生かすセルフ・ケア行動が促され、ポジティブな自己イメージに繋がったと考えられた。また本人の望むきょうだいのイメージワークによって、養育者イメージが改善したことは、実際にはいないが本人の望むきょうだいのイメージ表象上の出現が、実際の養育者である両親への期待水準を下げ、参加者たちの親イメージの改善をもたらしたといえる。こうした親のイメージ変容は自己イメージを改善出来る最も影響力の大きなものであった。

一方、コミュニケーション・スキルグループやストレスマネジメント・スキルグループのコーチングは、元来自己イメージが良好な参加者にとってはウェルビーイング改善を示したが、自己イメージが悪い参加者には効果が認められなかった。自己イメージが悪い参加者はソーシャルスキルトレーニングをしても効果が出ず、最初に自己イメージの改善を促すことを優先することの必要性が示唆された。

審 査 の 結 果 の 要 旨

世界の多くの国々で大学生のメンタルヘルスやウェルビーイングが悪化していることが報告されるが、その効果的な改善対策についてはまだ模索している段階にある。本研究は、中国人大学生を対象にしてまず横断的調査を実施し、その結果メンタルヘルスやウェルビーイングは自己イメージによって決められるが、その自己イメージ改善には、本人の持つ生物的な要因としての気質のコントロールの仕方を身に着けることや、親のイメージに関しては慈しむ笑顔の表情イメージ表象の構築が必要なことを見出した。次に3つの介入と1つの非介入の縦断的調査を実施し、親のイメージ改善と気質を生かすセルフ・ケア行動をとることを促した群が、唯一自己イメージの有意な改善とメンタルヘルスを含むウェルビーイングの有意な改善効果を見出したというものである。ソーシャルスキルトレーニング群は元来自己イメージのいい学生には効果が見られたが、自己イメージの悪い学生には効果が見られない結果を見出した。

本研究によって明らかになった知見は、健康心理学や健康心理療法学に関連した専門雑誌の3つの英文の

原著論文に掲載され、専門分野での評価を得ており、その先進性の高い研究業績を評価したい。

平成 23 年 12 月 21 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。